

全国長南会通信

53号

事務局 : 300-0301 茨城県稲敷郡阿見町青宿 930 長南秀則 TEL/FAX 0xx-xxx-xxxx

発行日 平成 28 年 4 月 5 日



上野不忍池の桜

上野彰義隊と長南平七

平成28年4月、東京上野公園界隈は今年も花盛りである。4月1日、東京大田区蒲田の博央産業(株)を訪問し、斎藤武夫氏にご先祖の長南平七に関するお話を聞いた。今回は江戸東京を舞台にした長南氏にまつわる話を紹介することにする。

時代は江戸時代の最終節、15代将軍徳川慶喜が大政奉還を行い、大政復古のクーデターが起こり、江戸開城となる。



上野東叡山寛永寺根本中堂

新政府軍に江戸開城を推進した勝海舟とは逆に、徹底抗戦を叫ぶ一橋家の家臣を中心に上野彰義隊が結成され、徳川慶喜が上野寛永寺に蟄居するとその護衛に当たるようになる。江戸占領軍である倒幕軍と市中警備役を自認する彰義隊とはたびたび紛争が発生し、事態を憂慮する新政府軍は、大村益次郎を指揮官とし、彰義隊を一掃するための上野攻撃を決定する。

慶応4年5月15日(新暦7月4日)梅雨の終わりの激しい雨が降りしきる中、兵器の質で勝る新政府軍は、寛永寺から不忍池の対岸の本郷に、当時世界最強の阿姆斯特朗砲を備え、歩兵、砲兵の共同攻撃を行い、上野戦争は、わずか半日で政府軍の勝利に終わることになる。その際、政府軍は、上野の山を全て方囲せず、1ヶ所味方の逃げ道を確保したという。そのため、彰義隊の生き残りは、そこから逃走したのではな

いかと思われる。そして、その中の一人に長南平七がいたのである。

平七は根岸、三河島方面に逃走したが、疲労と空腹のため江戸川河原で倒れていると、通りがかった回船問屋、品川浦瀬の豊三（後の斎藤家）が助け匿った。その後、回船問屋の跡継ぎが亡くなったので、平七は帰郷せず斎藤家を継いだのだった。

平七の孫に当たる斎藤松太郎には豊治という弟がいて、大変仲が良く、お互い何かと協力したという。昭和の大戦後、豊治の次女である房江が縁あって中村就一氏と結婚し、房江のルーツである「長南氏」の研究がスタートするというドラマチックな展開になるのである。

斎藤松太郎は斎藤武夫氏の父であり、中村就一氏の長南氏の歴史研究にあたり、当時1万円という大金を渡し激励した。

長南平七は、現在の宮城県松島湾寒風沢島出身であり、姉と妹を寒風沢に残し「故郷に錦を飾る」ため志願して江戸の彰義隊に参加した。



清水観音堂から不忍池を望む



彰義隊士の墓

上野公園西郷隆盛の銅像



平七が寒風沢に残した家族は、後に姉が亡くなり、残された妹は大変苦勞したとの斎藤武夫氏談である。

上野公園の西郷隆盛像の後ろ側に彰義隊士の墓がひっそりと佇む。当時、西郷さんの辺りには寛永寺黒門口があり、上野戦争最大の激戦地であった。彰義隊士の墓には桜の時期もあつてか花が手向けてあつた。もちろん長南平七はこの墓に葬られてはいない。彰義隊戦死者の遺体は、新政府軍を憚り放置されたままであつたものを、三ノ輪円通寺の仏磨和尚と寛永寺の御用商人の三河屋幸三郎が戦死者供養の官許を受けて上野山で茶毘にふし、一部を円通寺に埋葬した。

寛永寺黒門は円通寺に移されており、今でも弾痕の後が生々しい。(2016年4月)

7、8 頁の関連記事へつづく

青宿土地買収関連の経緯と当時の物価など



予科練記念館（茨城県阿見町）

『海軍は海軍航空機の操縦要員を養成するため、阿見原と霞ヶ浦湖岸に当時としては東洋一の教育訓練のための飛行場を造ることを計画した。大正6年（1917）頃の事であろう。具体的には海軍省独自でできるものではなく、政党、内閣、国会、県などの立法、行政機関等を巻き込んだ調整が、大急ぎで展開されたことであろう。しかし、この間の事情については、特にこれといった記録は発見できず詳細は不明である。

いずれにしても、大正9年3月、阿見村の原野と霞ヶ浦湖畔合せて約85万坪が海軍省によって、1坪約10銭3厘で買収され、飛行場としての地ならしが開始された。そして約1年4か月後、霞ヶ浦飛行場の開場式が行われたのである。買収された阿見村の当時の状況について、阿見町史では東京日日新聞が大正8年11月9日付茨城版に、次のように報じたと記している。

阿見飛行場の住民五百名立ち退きを嫌って騒ぐ移民の喧嘩が全敷地内に波及す。近く委員を挙げて当局陳情
既報海軍飛行場として海軍省が稲敷郡阿見村大字阿見地内に於いて部落田畑、原野等四百町歩を買収せしめる為め、敷地

内の村民三十余戸は既に立退きの準備を為すに至れるが、今回新に買収せる敷地五十町歩は多く他地方よりの移民の新開地にして、其の数四十余戸、人口凡そ二百五十名あり、是等は多く細民にして、移住後日尚ほ浅き者少からず、而も日下の処適當の土地なく、且移住を嫌ふ結果、主務省並に県当局を非難し、果ては喧嘩を極むるより、他部落の永住村民に迄波及し、敷地内に住む者約八十戸、四百数十名は七日頃より一斉に騒ぎ出し、家業も手に付かざる始末にて、移住民の不平殊に甚だしく、近く委員を主務省並に県に出頭せしめ、立退地の選定、斡旋等陳情すべしと云ふが、陸軍に於ても同時に飛行場設置の希望あり、愈々実施の暁は海軍飛行場は之と隣接する舟島村に引越すやも知れず。』

以上が阿見町発行「阿見と予科練」の中の1節で、海軍による阿見町霞ヶ浦周辺（現在の武器学校）と阿見原（武器補給所）の第一次土地買収の様子である。

「長南氏の研究」に青宿の長南氏は地下足袋1足の値段で土地を買収されたとあるが、昭和の買収単価1坪1円という金額が当時いったいどのくらいの価値であったか調べてみた。（茨城県稲敷郡）

(資料1) 大正10年頃の物価		
衣料品	学生服 1着	50銭
	背広注文服	30円
	地下足袋 (大正12年)	1円5銭
	長靴 (大正13年)	4円
食料品	豆腐	4銭
	食パン1斤 (大正7年)	14銭
	玉子1個	6銭5厘
	コーヒー	10銭
	もりそば	10銭
	カレーライス	10銭
	ラムネ	6銭
雑貨業	鉛筆	5厘
	化粧石鹸1個	15銭
	桐筆筒	8円
	自転車	50円
	メンソレータム	25銭
	大田胃酸	30銭
	大学目薬	10銭
交通機関	山手線	5銭
	上野～青森	7円23銭
	新橋～大坂	6円4銭
	手宮～札幌	55銭
	門司～熊本	2円70銭

(資料4) 給与の概要 (昭和10年頃)		
年齢	階級	棒給 (月額)
15	4等航空兵	6円20銭
16	3等航空兵	11円60銭
17	2等航空兵	13円10銭
18	1等航空兵	36円00銭
19	3等航空兵曹	51円60銭
21	2等航空兵曹	57円40銭
22	1等航空兵曹	64円70銭
25	航空兵曹長	140円50銭
29	航空少尉	201円00銭

左の表は、大正10年頃の物価。昭和10～20年頃の物価の資料が見つからなかったが、多分1.2～1.5倍くらいの物価上昇だったので、計算すればおおよそ見当がつく。しかし、戦後の昭和25年頃になると150倍くらいのインフレになっているので、経済の混乱ははなはだしかっただろう。

ちなみに昭和15年頃の平均年収は700円くらいだったのに対して、昭和25年には12万円に。また、新聞の購読料は昭和15年の月額1円に対して、昭和25年は70円、30年には300円と値上げになっている。「びっくりぼん」だ。

(資料2) 買収単価			
	第一次買収	第二次買収	第三次買収
時期	大正9年	昭和14年	昭和17年
場所	阿見村原野 霞ヶ浦湖畔	鈴木、一区 花室川流域	他
面積	280町歩	102町歩	45町歩
単価	反30円 坪10銭3厘	反300円 坪1円	反300円 坪1円

資料1より、地下足袋の値段は1円5銭であるから、昭和15年頃は1円50銭か2円くらいか？確かに土地1坪と地下足袋の値段は同じくらいになる。これは東京の物価の一覧なので、地方とは多少異なるかもしれないが、いずれにしても田畑1坪の値段がカレーライスや、もりそばと同じであったわけで、今では考えられないくらいの金額で買収されたであろうと思われる。

昭和になり満州事変以降、海軍はますます飛行機の搭乗員養成に力を入れ始め、昭和13年には、霞ヶ浦航空隊に第11練習連合航空隊が編成され、司令部を霞ヶ浦航空隊内に置いて、各基地における飛行操縦訓練を指揮することになった。

このため、霞空発足時の第一次買収で得た飛行場用地のみでは不足するため、霞空および土空拡張時の第二次、太平洋戦争勃発後の第三次等の買収が必要となった。第二次買収の対象となったのは、第一次買収時の未買収地約102町歩であり、主として飛行場周辺の土地であ

った。昭和12年～14年にかけて阿見原及び花室川流域の水田地帯を買収した。買収価格は、畑地でおおむね1反300円であったという。

第一次買収の時と比べ約10倍に上がった単価で設定され、宅地については家の解体費用などもみてくれて案外割高で補償されたようだ。もちろん戦争下のインフレもあり、大正時代よりも物価は上昇していたはずだが、軍は買収を急ぎたかったのであろう。第一次買収では霞ヶ浦中心、その後の第二次、第三次買収では、阿見原の飛行場あたりが中心に買収になったようだ。阿見原は開拓地で他県からの移住者も多く、畑を開墾して住居を建ててまもなく移転を余儀なくされた人もあったようだ。

第一次買収に対して、第二、第三次買収は取り壊し、引越し、立替費用などで5000円ほどの金が入ったので預金ができたといいところもあったが、後のインフレで金の価値がなくなって無一文になったり、買収費用を使い果たして途方にくれるものもあったという。

俳句を読む長南氏

江戸時代、俳句は身分や職業に関係なく、武士、農民、町民の間で広く行われた。江戸末期の長南氏の中で二人の俳句が残っている。

一人は石巻長南氏の長南丈八郎だ。丈八郎は寒風沢から分家した茂左衛門の9代目、大きな回船問屋である。

桜折る子^{おおつえ}大津絵換えて戻したり

春、美しく咲いた桜をおろうとした子に、折るのをやめさせ、大津絵をあげたという俳句。大津絵とは錦絵のような版画で刷ったもの。子供はさぞかし喜んだろう。

もう一人は、莊内酒井藩の下級武士、長南^{とうしゅん}桃春。桃春は長南年恵の祖父であり、年恵の墓石に桃春の句がある。

どちらを振り向いても花の世なりけり

世の中はあわただしく物騒だけど、桜は今年も満開だ。という意味だろう。桃春の句は他にも2つある。

あしみつれなざさ 芦見^{あしみつれなざさ}連渚 や冬の夕日向

冬の芦原の景色を連れ立って見に行くと小春日和で気持ちが良かったと言う意味だろうか。

こち 東風吹くや天窓の重き酒の酔い

春に酒に酔って天窓を開けようとしたが体がだるくて重く感じた。という場面であろう。

全国長南会会長、埼玉県の長南俊春氏は、ご先祖のDNAを受け継いでいるのか俳句を嗜む。以前「雅楽谷」という俳句雑誌に掲載された秋の句を紹介したが、今回は春の句をご披露する。

我を待つ桜並木の権現堂

ふさ 塞ぎ止め しばし 暫し 楽しむ はないかだ 花筏

いちじん 一陣の風吹き荒れて花吹雪

冠雪の裾野の桜富士の山

久喜市 長南俊春

会計報告

平成 27 年 1 月 1 日～12 月 31 日

	入金	出金
前年度残高	565,580	
会費	291,000	
その他の収入	10,000	
利息	127	
旅費交通費		13,104
50号発行代(モノクロ)		12,569
51号発行代(カラー)		21,316
52号発行代(カラー)		21,232
通信費		4,740
支払手数料		5,062
事務用品費		25,527
和泉守墓管理費用		20,000
べに花祭り協賛金		20,000
弔電他		4,757
合計	866,707	147,307
次年度繰越金	719,400	

残高内訳	
現金	55,593
普通預金	639,519
当座預金	24,288
合計	719,400

昨年は、会費の納入ありがとうございました。今年にはできるだけ現地へ出向こうと思っています。何卒よろしく願います。

昨年1年間の収支報告をいたします。ご確認ください。

長南会通信発行費は、印刷代、郵送代を含む。

通信費はその他の郵便代、切手代等。

その他の収入は、「長南氏の研究」書籍販売金額。

平成 28 年度 年会費納入のお願い

振替用紙を同封しますので、年会費1口 2,000円をお振り込みください。

郵便局のキャッシュカードをお持ちの方は、振替用紙を使用しないでATMから次の口座にお振り込みください。

全国長南会 記号 10650 番号 13085711

ATMからだど、手数料(会負担)が無料になります。

全国長南会の運営のため、ご協力お願いします。

はじめのなかも 土師中知



東京蒲田の博央産業(株)の事務所に左の絵が掲げてある。土師中知が観音様を収めたという浅草神社の言い伝えより、代表の斎藤武夫氏は深く観音信仰を行っている。この土師という姓は、相撲の神様「野見宿禰」が当時の垂仁天皇より賜ったものであり、後に菅原氏、長南氏となるのである。

『浅草寺縁起』によれば、推古天皇36年(628)3月18日の早朝、江戸浦(現在の隅田川)で、^{ひのくまのはまなり}檜前浜成^{たけなり}と竹成という2人の兄弟の漁師によって一鉢の仏像が引きあげられた。その尊像を聖観世音菩薩と見極めたのが、土地の^{ごうじ}郷司である^{はじめのなかも}土師中知だ。中知はこの尊像に深く帰依して自らも出家、自宅を寺と改めて観音さまの供養に生涯を捧げた

という。

このように聖観世音菩薩の感得、奉安には3人の人々がかかわるものだった。後にこの3人は神(あるいは仏の分身)としてまつられるところとなり、その社が三社権現(現在の浅草神社)である。明治の神仏分離以後、5月の行事に変更された「三社祭」が以前は3月18日を中心とした祭であったのも、このような由来があったからである。(浅草)

きよみずかんのら 清水観音堂

上野寛永寺は京都と比叡山の^{なら}関係に倣い創建された。比叡山延暦寺が京都御所の鬼門を守護すると同様に、東叡山寛永寺は江戸城の鬼門除けとして建立された。そして、比叡山や京都の寺院を模して数多くの寺院が作られた。その中のひとつが清水観音堂である。



京都清水寺を模した清水観音堂

すとくいん 落語「崇徳院」

熊さん出入りの^{おおだな}大店の若旦那が恋の病で飯も食えない状態。上野清水の観音様で逢った「水の垂れるようなお嬢様」がそのお相手。お嬢様が残した短冊で崇徳院の和歌「瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあわんとぞ思う」

を手がかりに、熊さんのお嬢様探しが始まる... 云々のドタバタ劇だが、噺の中に上野の清水観音堂から見えるものは、不忍池の弁天様、湯島天神、神田明神、^{しょうてん}聖天の^{まつちやま}待乳山とある。現在は不忍池は見えないが、その他はビルが建っていて見えない。待乳山は浅草なので反対方面である。

中村房江 1932-1969

右は、斎藤豊治の次女、斎藤松太郎の姪
祖先は塩竈市寒風沢彦和田定吉系長南氏
中村就一氏の先妻
1969年中村就一画 油F10号

中村氏の自伝「我が人生を決定したもの」は当通信で連載したが、2014年4月発行47号(その4)で中断している。47号では、「終戦後、房江と結婚しお互いの先祖調べをしているうちに、房江の先祖である長南氏の歴史調べに没頭した」というところで終わっている。昨年夏にお会いしたときに、続きを待っているとお話ししたところ「僕は、事務的なことが出来なくなった。」とおっしゃっていたが、再開を期待しているところだ。



博央産業(株)社屋

斎藤武夫氏が代表取締役である博央産業(株)はJR蒲田駅のすぐ近くにある。前述の斎藤松太郎が父であり、房江は従兄妹にあたる。氏はご先祖を大切にすることと、深く観音信仰を行うことが会社経営にもつながると考えている。そのため、寒風沢島の長南和泉守の墓のことは、いつも気遣っておられ、何かとご協力いただいている。

この度は、仕事中お忙しい中、時間を割いて貴重なお話をいただきありがとうございました。
今後ともよろしくお願ひします。

博央産業(株)を訪問した4月1日は高速道路料金の改定日だった。慣れない首都高速を走り、照光氏のナビゲーターに助けられ、何とか現地へ到着した。俊春会長は電車で現地に合流。帰り道は、俊春会長、照光副会長と首都高速から東北自動車道に入り、埼玉県久喜市の会長宅を経由し茨城県青宿に向かった。



博央産業(株)にて 照光、斎藤武夫、俊春、秀則